

# 4

## 視力障害と斜視その他 (眼科)

早急に治療が必要な乳幼児の眼疾患として、先天白内障、網膜芽細胞腫、発達緑内障などがあります。これらはまれな病気ですが、早く見つけて早く治療する必要があります。先天白内障と網膜芽細胞腫は、視線のずれ（斜視）や瞳（眼の中心の黒い部分）が白く見えることで発見されます。「先天白内障」は、眼の中にあるレンズが生まれつき濁っている病気です。老人性の場合と違って、早期に手術をしないと手遅れになってしまいます。レンズの濁りのために光が眼の中に入らず、視力が発達しないからです。濁りが強い場合は、片眼性では生後1か月半以内、両眼性では3か月以内に手術する必要があります。また、「網膜芽細胞腫」はまれな病気ですが、小児癌の一種ですので、急いで治療する必要があります。「発達緑内障」は先天性の緑内障で、黒目が大きくなり、角膜混濁を起こします。この病気も早急に治療しないと、失明してしまいます。

次に、乳幼児でよく見られる「弱視」と「斜視」についてお話しします。

赤ちゃんは、生直後からよく見えるわけではありません。生まれてすぐの視力は、保護者の顔がぼんやり見える程度で、3歳くらいまでの間に急速に発達し、6歳くらいで大人とほぼ同じ視力になります。このように、乳幼児期は視力の発達にとって、とても重要な時期です。赤ちゃんの視力が発

達するには、毎日ちゃんとピントの合ったものを見る必要があり、ピントが合わない状態が続くと、視力が発達せず、弱視になります。弱視とは眼鏡やコンタクトレンズを使っても視力が出ない状態ですが、3歳から4歳ごろまでに治療を始めれば、就学前までに矯正1.0の視力を得ることができます。しかし、弱視の発見が遅れると、治療しても視力が充分に出ないことがあります。

弱視の原因で一番多いのは、強い遠視や乱視です。強い遠視や乱視があると見にくいはずですが、生まれつきのことなので、子どもさんは「見にくい」とは言いません。両眼性の場合、眼をしかめたりして見にくそうにすることはありますが、片眼の場合は、症状はありません。

そこで、弱視を早期に発見するために、3歳児健診で視覚検査が行われていて、家庭で視力検査をしていただくことになっています。健診の前にやり方を説明した文書が送られてきますので、必ず家庭で視力検査を行ってから健診を受けてください。令和元年から、熊本市の3歳児健診には、屈折検査が導入されました。これにより遠視・近視・乱視の有無と程度が検出できるので、弱視が発見されやすくなると期待しています。しかし、視力検査をしないと発見できない病気もあるので、家庭での視力検査は必ず行ってください。

また、斜視、特に内斜視は、弱視の原因になったり、両眼視の発達を妨げたりするので、早期発見早期治療が必要です。

斜視かなと思ったり、瞳が白く光って見えたり、また黒目

が大きくて濁っているような場合、それから3歳児健診で眼科受診を勧められた場合は、もう少し大きくなって聞き分けが良くなってからと思わずに、すぐ眼科を受診してください。乳幼児用の視力検査法もありますし、赤ちゃんでもできる検査はいろいろありますので、問題となるような異常があるかどうかを調べることは、幼い子どもさんでもできます。



## 一口メモ

### 赤ちゃんの鼻づまり

赤ちゃんは本来鼻で呼吸をしています。ところが息が通る通路がせまくて、しかもたまった分泌物を外に出す仕組みが未熟なため、長い睡眠時間中鼻づまりで寝苦しくなったり、泣いたりして病院を訪れることが時々あります。

他の症状がない場合は、鼻水を吸い取る器具で鼻水を取ったり、上体を起こしたり綿棒を使って空気の通り道を確保されるだけで良いでしょう。また、冬場には湿度を保つように心掛けることも大切です。